

『クリスマス・ストーリーズ』（その4）

Charles Dickens, *Christmas Stories* – Part IV

藤本 隆康訳

Takayasu FUJIMOTO

ゴールデン・メアリ号の遭難

私は十二歳のとき、船乗りの見習いになり、文字通り、また比喩的に言っても、数々の荒っぽい天候に見舞われた。私が初めて意見らしきものが持てるようになってからずっと、一つしか話題のない人間ほど人を退屈させることはないと思っている。もちろん何一つ話題のない人間は論外である。そのため、私はこれまでできることは何でも独学で学んできた。私は教育を受けてはいないが、幸いなことに、たいいていの事に知的な関心を持つことができるのである。

ここまでお読みになって、私が「自分」のことを長々と述べ立てる習癖があるのではないかと想像される向きがあるかもしれない。それは誤解である。私は、いわば、知らない人たちが集まっている部屋に入って、誰かに紹介してもらるか自己紹介しなければならない立場に置かれているわけで、私が誰で何をしているのか、ただありのままに知ってもらうために、失礼を顧みず少しばかり自分のことを述べさせてもらったのである。それ以上付け加えるとすれば、私の名前はウィリアム・ジョージ・ラヴェンダーで、父親が溺死して半年後にペンリスで生まれ、現在、一八五六年の聖なるクリスマスの季節¹の二日目を迎えたところである。

カリフォルニアで金が見つかるという噂が飛び交い始めたとき——それは、ほとんどの人が知っているように、イギリスの植民地であるオーストラリアで金が発見される前のことであった——私は西インド諸島にいて、諸島間で貿易の仕事をしていた。敏速に帆走する縦帆式帆船の指揮を執り、その帆船の共有者でもあったことから、私は自分の都合に合うように仕事の手配をし、自分で動いていた。従って、カリフォルニアの金に私が食指を動かすということにはなかった。

しかし、私が再度イギリスに帰国する頃には、事態は火を見るよりも明らかになっていた。博物館や金細工師の店にはカリフォルニアの金が流入し、帰国後始めて取引所で出逢った友人（私と同様船乗りであった）が懐中時計の鎖にカリフォルニアの金塊を吊るしていた。私はその金に触れてみた。それは殻を剥いた胡桃のようで、割れ目がでこぼこことついていたが、一面に電鍍が施されていて、見たこともない代物だった。

私は独身なので（この世にとっても私にとっても、もったいないほど善良な許婚の女性はい

たが、彼女は結婚式を挙げる六週間前に天に召された)、海に出ない時にはポプラの家に住んでいる。私のポプラの家は、私が生まれる前に女中として母親に仕えていた老婦人が管理されていて、きちんと手入れされている。彼女は実に凛々しく正直な女性で、まるで私が彼女の一人息子であるかのように、私のことを愛してくれている。私がどこに航海に出ようと、寝る前に彼女は必ず頭を垂れて、「慈悲深い主なる神さま！ ウィリアム・ジョージ・ラヴェンダーを祝福し、護ってください。救い主イエスさまのお護りによって、恙無く帰国できますように！」と祈ってくれていることを知っている。私は何度も危険に遭遇したが、その時には彼女の祈りを思い出し、それで私は救われたのだと確信している。

私はこの老婦人と共にポプラの家で一年の大半を過ごしていた。その年、私は長い間西インド諸島で暮らしていたため、かなりひどい熱病にかかってしまった（私にしては珍しいことだった）。やがて、もともと身体が強健で丈夫な私は、手に入る本を片っぱしから読み漁り、次の仕事を考えながら、シティのレドンホール・ストリートを歩いていた。その時出逢ったのが、リヴァプールのスミシク&ウォーターズビィと私が呼んでいる男だった。私は飾り窓に置いてある経緯儀を覗いていたが、ふと目を上げると、正面（舳先）から彼の姿が迫って来たのである。

スミシクとかウォーターズビィと言っても、それは特定の個人を指しているわけではない。私はそうした名前の人物は誰一人知らないし、数年溯ってもそのどちらの人物の名もあのリヴァプール・ハウス型船楼²で聞いた覚えもない。私が暗に言った名前は、実際にはその船楼そのもののことで、賢明な商人とか真の紳士であればけっして足を踏み入れない場所なのである。

「これは、これは、ラヴェンダー船長」と彼が言った。「地球上の誰よりも、あなたに逢いたいと思っていました。あなたに逢いに行こうとしていたところです」

「おや！」と私は言った。「まるで私と遭う手筈になっていたみたいだね」そう言って私は彼と腕を組み、王立取引所に向かった。そこに着くと、私たちは時計塔のある取引所の裏手を行きつ戻りつしながら話を交わした。彼はある計画を持っていた。それは、積荷をカリフォルニアのインディアンや移民に運ぶための新しい船を二人で借り、買い取った金をその船で持ち帰ろうというものだった。計画の細部について私は聞こうとしなかったし、立ち入る権利もなかった。ただ言えることは、その計画がとても独創的かつ申し分ないもので、安全確実で、間違いなく大きな利益が見込めるものだった。

彼はあたかも私が彼の分身でもあるかのように、その計画を腹藏なく話してくれた。話し終わると、彼はこの上なく有利な分け前に与える計画だと言って私に誘いをかけてきたが、子供であった時も大人になってからもそんな気前の良い誘いを受けたのは初めてだった——あるいは、商船の他の船長もきっとそんな旨い話は聞いたことはなかったであろう——そして彼は次のように言って、ロープ（話）を締め括った。

「ラヴェンダー、あなたもよく知っているように、現在あの地域の海岸や国は無法状態にあり、無法がまかり通る現状は目に余るものがあります。外国行きの船舶の乗組員たちは、陸地に達するとすぐさま脱走し、本国行きの船舶の乗組員たちは途轍もない賃金で雇われていて、

彼らの意図は明らかに船長を殺害して積荷の金を略奪することにあるんです。誰一人信用できず、悪が大手を振ってのさばっているんです。それで」と彼は続けた、「私があなたのことをどう思っているか、あなたは承知しています。そして、私が当たり前のことを口にしていただけだということも分かってくれています。あなたは私がただ一人頼りにできる人であり、あなたの誠実さ、分別、精力...」後は省略する。彼の思いは昔も今も分かっていることなので、彼の言ったことをこれ以上繰り返すこともないからである。

前述したように、私はいつでも航海に出られるほど体調は回復していたが、この航海には多少の疑問を抱いていた。もちろん、この航海には通常よりもはるかに大きな困難と危険が伴うことは、誰に言われるまでもなく分かっていた。それに直面することを私が恐れていると思われるのは困るのだが、私の考えでは、男らしい動機、あるいは危険に立ち向かう気力を持つのは、自分がどのような人間であるかを篤と考え、「こうした危険など、恐るに足りない。いかなる苦難であっても、切り抜ける術はある。あとはただ、気高く偉大な御手に委ねるだけだ」と穏やかに自らに言い聞かせることができる人間だと思うのである。こうした信念から、私は思いつく限りの危険を注意深く思い描いた（そうすることが自分の務めであると考えたからである）。通常の嵐、難破、海上での火事など、私の手に委ねられている生命を救うにはどうすればよいか、ありとあらゆる事態を想定してみたのである。

私が苦慮していたので、友人は、一人で好きなだけ歩いて考えをまとめてみてはどうですか、後にペル・メル³にある自分のクラブで食事をしましょう、と言ってくれた。私はその勧めを受け入れ、上甲板を歩くような気分でその辺りを二時間ばかり行き来し、その間、風見鶏や帆桁を見るように見上げたり、時には舷側を注視する気持ちでコーンヒル⁴に目をやったりしていた。

食事の間中、そして食事が終わってからもずっと、私たちは何度もその計画について話し合った。私は彼の計画に対する私の考えを伝え、彼はあなたの言う通りだと言ってそれに同意してくれた。決意はほぼ固まっているがまだ完全には決めかねている、と私は言った。「じゃ、それなら」と彼が言った、「明日、私と一緒にリヴァプールに行って、ゴールデン・メアリ号に逢ってみましょう」私はその船名が気に入る（船名がメアリで、ゴールデンが幸せを象徴するとすれば、船自体が黄金のように尊いものに思われたからである）、リヴァプールに行ってみようと伝えた時には、私の気持ちほぼ固まっていた。翌々日の朝、私たちはゴールデン・メアリ号に上船していた。彼がリヴァプールに行って船を見ようと言ったとき、それがどんな船であるか、私はすでに分かっていたと言っていい。断言してもいいが、メアリ号は私が目にしてきた中で、最高の「美」を誇る完璧な船であった。

私たちが船内の全ての肋材を点検し、舷門に戻って係船ドックから陸に上がったとき、私は友人に手を差し出した。「さあ、手を」と私は言った、「さあ、心を込めて。私がこの船の指揮を執る。この身を全て船と君にあずけよう、ジョン・ステディマンが一等航海士として加わってくれるなら」

ジョン・ステディマンは私と一緒に四度航海に出ていた。最初の航海でジョンは三等航海士

として中国に向かったが、帰国した時には二等航海士になっていた。その後の三度の航海では、彼は一等航海士として私の船に乗り組んでくれた。ゴールデン・メアリ号を借り切ったとき、彼は三十二歳になっていた。彼は青い目をした、敏活、聡明で端正な容姿をしたやや小柄な人物で、自分が必要とされている時とそうでない時を弁えて行動し、その顔は誰にも好感を与え、全ての子供が懐いていて、クロドリのようにいつも囀りながら動き回っていた。船員としても、非の打ち所がなかった。

私たちはすぐにリヴァプールの貸し馬車に乗り込み、三時間以上も馬を走らせてジョンの居場所を探した。ジョンはヴァン・ディーメンズ・ランドから一ヶ月前に帰国したばかりで、彼がリヴァプールで活発に動き回っていると風の噂に聞いていた。あれこれと問い合わせた場所の中に、彼がいちばん気に入っていた下宿屋が二軒あって、それぞれの下宿に彼が一週間続けて滞在していたことが分かったが、彼はあちこちを動き回っていて、「帆船の端の方に位置を取って、ウェールズの最も高い山へと向かう」（彼が下宿屋の人に、そういつて言っていた）ということだったが、彼がどこにいるのか、いつ戻って来るのか、誰には分からなかった。しかし、驚いたことに、ステディマン氏という名を言ったとたん、誰も顔が決まったようにぱっと輝くのであった。

運に見放されて面食らった私たちは、船に例えると裏帆を打ち、船尾を風上に、船首を友人のいそうな方角に向けながら通りをのろのろと進んでいたとき、ふと私の目に留まったのは、まさに玩具屋から出て来るジョン・ステディマンだった！ 彼は小さな男の子を腕に抱えていて、見目麗しい二人の女性を彼女たちの馬車に乗せてやっていた。後で彼が言ったことであるが、三人に逢ったのはその時が初めてだったが、彼女たちが船首の方が船尾より沈んで転覆しそうなノアの箱舟を子供に買い与えようとしているのを玩具屋の外から覗いたとき、その光景に強く心を魅かれて中に入り、飾り窓に置かれている出来具合がますますの帆船を子供に買わせてもらいたい、こんな立派なお子さんがこんな雑に作られた舟を持ったまま大人になるのが心配です、と言って夫人たちを説き伏せたということだった。

私たちは海岸（ジョン）に近づいたり遠ざかったりして航行（待機）していたが、婦人方の乗った馬車の御者が馬車を漕ぎ（駆り）出すと、おーいとジョンを呼びかけた。彼が私たちの船(馬車)に上船する（乗り込む）と、私は友人に出していた条件を真剣な気持ちで彼に伝えた。船の真ん中で一発食らってぐらっときた、というのが彼の答えだった。「ラヴェンダー船長」とジョン・ステディマンが言った、「あなたの褒め言葉には、とても逆らえません。あなたが信号を掲げられるなら、あなたと共に二十年でも世界中を航海し、ずっと傍から離れません！」それで実際に話が決まったと思い、私はゴールデン・メアリ号ですでに海に出た気分になっていた。

スミシク&ウォーターズは休む間もなかった。二週間で船に策具が装備され、荷の積み込みが始まった。ジョンは常に船の中を動き回っていて、万事怠りないように船荷の点検をしていた。私が朝晩を問わずいつ上船しても彼は常に立ち働いていて、下の船倉にしようと、昇降口の甲板にしようと、あるいは船室を総点検してイングランドの赤い薔薇、スコットランドの

桔梗、そしてアイルランドのクローバの雌花の絵を釘で留めたりしていようと、^{つぐみ} 鶯 さながら歌を囀っていた。

その船には二十人の船客を乗せられる余裕があった。アメリカに出港するという広告を出すと、すぐにその二十倍以上の客を乗せられるほどの船乗りがそれに応募してきた。乗組員を採用するに当たって、私とジョンが(一緒に)人選を行い、その道で優れた腕を持っている者だけを選んだ——その港町で見つけることのできる最高の水夫たちだった。そして、しっかりとした船主、しっかりとした準備、しっかりとした士官と乗組員、そして万端の設備を整えた最高に立派な構造を誇る船に乗って、私たちは一八五一年三月七日四時十五分に水先案内人と別れ、順風に乗って大西洋へと針路を取った。

その時までには私が乗客と親しくするだけの余裕がなかったことは、容易に察していただけるであろう。ほとんどの乗客はその時には船酔いで船室の寝棚に横になっていた。しかし、私は彼らの所に足を運び、どうすれば酔いから醒められるか言って聞かせ、船室にじっとしていないで甲板に上がって風に当たった方がいいですよと説得したり、冗談や慰めになる言葉をかけて励ましたりした。食卓で顔を合わせるよりも、それで最初から船客と打ち解けることができ、彼らと親しくなれたのかもしれない。

この機会に、船客のことを少し詳しく紹介しておく必要があるだろう。カリフォルニアにいる夫に逢いに行こうとしている若くて、明るい瞳をした花のように美しい夫人。彼女は夫が目にしたことのない、ひとり娘で三歳になる小さな女の子を連れていた。またその夫人よりも五歳くらい年上(三十歳くらいであろうか)の、黒い服を着て落ち着いた感じの若い夫人は、兄に逢うのが目的だった。そして、目がもっと澄んで赤くなかったら鷹そっくりの老紳士。彼は金を手にすることを朝、昼、晩、のべつ幕なしにしゃべり続けていた。しかし彼がその老いた腕で金を掘り当てようと思っているのか、あるいはそれを買い付けようとの思惑があるのか、あるいは物々交換で手に入れようとしているのか、はたまた詐欺を働こうとしているのか、また他人から略奪しようとの魂胆があるのか、彼は自分の思いを口にすることはなく、航海に出た目的をどこまでも隠していた。

この三人と幼児はすぐに船酔いから回復した。その子はまことに愛くるしく、私にとっても懐いてくれた。ただ認めざるを得ないのは、ジョン・ステディマンと私が彼女の可愛らしい心の中で地位が逆になり、彼が船長で私が一等航海士になっていたことである。ジョンと一緒にいる彼女、そして彼女と一緒にいるジョン、それは見て惚れ惚れする光景であった。「いない。いないばー」をしているのを見ると、彼が、サゴール島⁶の岬の沖合いで帆船オールド・イングラント号の船長が具合を悪くして吊り床に横たわっていたとき、手にナイフを持って船室に下りる階段から中に忍び込もうとしたマレー人やマルタ人を鉄棒で叩き殺した人物であるとは、とても考えられなかったであろう。しかし、それが彼だったのである。彼は手摺り板を背にして、そうした賊を何人でもやっつけたことであろう。若い母親の名前はアサフィールドといい、黒い服を着た夫人はミス・コウルショー、そして老紳士はラークスという名だった。

女兒は豊かできらきらと輝く金髪をしていて、その巻き毛が彼女の顔にふさふさとかかっていたことから、ステディマンは彼女のことを「ゴールデン・ルーシー」ちゃんと呼んでいた。だから、私たちはゴールデン・メアリ号とゴールデン・ルーシー号といった二隻の船に恵まれていたわけである。ジョンはずっとそう思っていて、二人はよく甲板に出て遊び回り、そんな時に彼女は、船が何か生きているもの——妹か友達で、船が自分と同じように同じ所に向かっていると思っていたようである。彼女は舵輪のそばにるのが好きで、天気の良い時に、私は足もとで彼女が船に話しかけるのを聞きたい一心で、当直の舵手のそばによく立っていたものである。これほどのお人形を持ったのは、彼女にとって初めてだったのではないかと思う。彼女はリボンや小さな装飾品を策留め栓⁷に結びつけて船をよく飾っていた。それを取り除こうとする者はおらず、触るとすれば、ただそれが風に吹き飛ばされないようにするためだった。

もちろん私は若い二人の女性の世話を引き受け、彼女たちを「愛しい方」と呼んでいたが、彼女たちは別にそれを気にすることはなかった。私が何を言おうと、それは父親が子供を保護する気持ちから出ていることが彼女たちには分かっていたからである。食事の時には、私は自分の席の両脇を空けて、右側にアサフィールド夫人を、左側にミス・コウルショーを座らせて、未婚の女性には朝食を配る役目を、既婚の夫人にはお茶を出す役を引き受けてもらった。また彼女たちの前で黒人の給仕係に「トム・スノウ、こちらのご婦人方はお二人ともこの家の女主人なのだから、お二人の指示には分け隔てなく従いなさい」と言うと、トムが笑い、それにつられて皆が笑った。

老人のクラーク氏は見ても不快な感じで、進んで話しかけたり話を交わしたりしたくなるような人物ではなかった。彼が浅ましく利己的な男であり、歳を取るにつれてますますその性格が歪んでしまっていることが一目で見て取れたからである。彼が皆と違って私たちに無礼な態度を取ったと言うのではない。船首でも船尾でも船の上で喧嘩騒ぎは起きなかったからである。ただ言っておきたいのは、一緒に食事をするのはご免被りたい男だということである。もし選択の余地があれば、彼を避けるために針路から数ポイント方位を変えてまでして、「ご免だ！あの男と一緒にでは！」と言いたくなるような人物だった。だが、クラーク氏には一つ奇妙にその性格と矛盾するところがあった。つまり、彼がルーシーに対して驚くほど強い関心を示していたことである。彼が子供のことを気かけるとはとても思えなかったし、言い添えるなら、彼は人のことなど屁とも思っていなかった。それでも、ルーシーが長い間甲板にいて彼女の姿が見えないと、いつも彼は不安を覚えてそわそわしていた。彼は、ルーシーが船から海に落ちるのではないか、昇降口から転げ落ちるのではないか、船の作業中に策具から滑車か何かが頭上に落ちてくるのではないか、あるいは何か怪我でもするのではないか、等々といつも気を揉んでいて、彼女が何か貴重な品でもあるかのように、彼女を見たり触ったりしていた。彼はいつも少女の健康を気遣い、娘さんの健康にはくれぐれも留意して欲しいと絶えず母親に頼んでいた。少女が彼のことが厭で、彼に逢うと身を縮めて彼を避けようとし、他の人たちから宥められておずおず彼に手を差し出していたことを考えると、少女に対する彼の態度はなおさら不思議だった。船員や船客の誰もがしばしばそのことに気づいていたが、誰も彼の心が読めな

かった。しかし、そのことは誰の目にも明らかだったので、ゴールデン・メアリ号が老紳士を優しい気持ちで愛しんでいるとしたら、メアリ号はゴールデン・ルーシー号にきつとひどく焼餅を焼いていることだろう、とジョン・ステディマンが老ラクスの耳に届かない所でよく言っていた。

この話を進める前に、私たちの船について述べておく。船は三百トンの帆船で、十八人の乗組員、ジョンの他に一人の二等航海士、船大工、鍛冶工というか兵器係、二人の見習い（一人はスコットランド人の、小柄で貧弱な少年だった）が乗っていた。ボートを三隻——二十五人が乗れる長艇、十五人を運べるカッターボート、十人が乗れる磯船——を備えていた。私は実際に乗れる人数に従って、それぞれのボートの収容能力を書き留めた。

もちろん、悪天候や向かい風に悩まされることもあったが、六十日間は大体のところ皆にとって申し分ない天候に思われた。その時期に私は航海日誌や日記に二つの所感を書き留めるようになった。一つは、驚くほど異常な量の氷が海を蔽っていること、そして二つ目は、海に氷が張り詰めているにもかかわらず、夜になると恐ろしいほどの漆黒の闇に包まれたことである。

五日半の間、こうした氷に閉ざされた海路から抜けるために船の進路を変えようとしたが、いたずらに足掻くだけで二進も三進もいかなかった。私は少しでも南に向かおうとしたが、その間ずっと氷に取り囲まれていた。一度アサフィールド夫人が甲板で私の傍に立って、畏怖の念に打たれた様子で私たちを取り巻いている大きな氷山をしばらく見つめた後、囁くように言った、「ああ、ラヴェンダー船長、まるで大地が氷に変わって、切り裂かれたように見えます！」私は笑いながら言った、「こんな光景を見たことのないあなたが、そう思うのも当然です」しかし私は、それまでその氷山の二十分の一ほども見たことはなく、彼女と同じような感慨を覚えていた。

しかし、六日目の午後二時、つまり、六十六日が経ったとき、帆桁の上に登っていたジョン・ステディマンが、前方で氷が消えていると天辺から叫んだ。午後四時前、船の真後ろからやや強い微風が吹き、日暮れになって私たちは氷が途切れた海域に出た。その後、ちょっとした強風になり、快速帆船ゴールデン・メアリ号は夜の間ずっと追風を受けて快調に進み続けた。

私は、太陽や月や星が天上から消え落ちて時が消滅することがない限り、これ以上に暗さが増すことなどあり得ないと思っていた。しかし、その時の闇に比べれば、以前の闇にはまだ明るさがあったと言えるだろう。その時、私たちは底知れない闇に包まれていて、目が圧迫されて痛みを覚えるほどだった——目の間近に、しかも目に触らないように当てられたで黒い濃密な目隠しをまったく光のない状態で見ると、まさにそういった感じだった。私は見張り番を二人にし、ジョンと並んで船首に立ち、夜通し警戒を続けた。しかし、彼が黙っていると、腕を伸ばして彼に触らない限り、彼がすぐ傍にいることも分からなかった。彼が船室のベッドでぐっすり寝込んでいたとしても、私は彼がずっと傍にいると思ったことであろう。私たちは、誰もが見張るといよりは、目と耳の両方を極力働かせて音を聞き取ろうとしていた。

翌日、船が氷の海から脱してから着実に上昇していた気圧計の水銀柱が、一定の目盛りのところで落ち着いていた。一、二日は中断を余儀なくさせられたが、私は出航以来きわめて順調

に天測を続けていた。六分儀で正午の太陽高度を計ると、船はホーン岬のニュー・サウス・シエトランド沖、南緯五十八度、西経六十度の地点に達していた。その日は、出航して六十七日目だった。船位の推算が精確に行われて航海図が作成され、船はトラブルもなく順調に帆走を続け、誰もが健康で、乗組員は臨機応変にてきぱきと任務を遂行し、誰もが満足していた。

以前と同様の暗黒の夜が訪れ、私は甲板で八夜目の見張りをしていた。その時も昼間にほんの少し眠っただけだった。私は常に操舵の傍で見張りに就いていて、氷の海域にいた時には、しばしば自分で舵を取っていた。実際に経験した人でなければ、そうした状態で、しかも真っ暗闇の中で、ただ目を開けていること——文字通り目を開けること——だけで、どれほど辛い苦痛を覚えるか、とても想像できないであろう。闇が目を突き刺し、闇によって視力が奪われる。目が闇の中に模様を描き、まるで顔から飛び出して自分を見ているかのように、闇の中でぴかっと光るのだ。真夜中を過ぎ、元気溘刺としたジョン・ステディマン（日中は休んでもらっていたからである）が私に言った、「ラヴェンダー船長、どうか船室に下りてください。立ってられないくらいじゃないですか。声にも元気がありません。下で少し休んでください。氷塊が当たったら、呼びますから」私はそれに答えて言った、「ああ、そうだね、ジョン。一時過ぎまで待って、それから決めよう」私は懐中時計を見るために、船の角灯をちょうど持ち上げたところだった。時刻は十二時に二十分だった。

一時五分前、ジョンは見習水兵にもう一度角灯を持って来てくれと大声で命じた。私がもう一度彼に時刻を告げると、彼はどうか下に行ってくださいと改めて懇願した。「ラヴェンダー船長」と彼は言った、「万事、順調に運んでいます。あなたには一時間だってゆっくりしていただけません。ですから、あなたに敬意を払い真剣な気持ちでお願いします、どうか下で休んでください」結局、私は、三時間以内に自分から甲板に上がって行かなければ、すぐに起こしてもらおうという条件で、彼の言葉に従った。そう決めると、私は後をジョンに任せた。しかしその後、私はあることを聞くために一度彼を呼んだ。私は気圧計を怠らず見ることにしていて、水銀柱が依然としてまったく変動していないのを確認していたが、最後にもう一度周囲の様子を見ておこうと——何も見えない暗闇なのにそんな言い方ができるとしたらの話であるが——昇降口の階段を上がった。その時、ゴールデン・メアリ号が海面を切り裂きその後には飛び散っていく波の音に、私は何か空ろな響きを聞いたように思った。何かに反響しているような異常な音だった。私は右舷の後甲板の手摺りの傍に立っていて、ジョンに船尾の私の方に来るように呼びかけ、波の音を聞くよう促した。彼は全力を傾注して耳を澄まし、それから私の方に向けて言った、「間違いありません、ラヴェンダー船長、あなたはずっと休息を取られていません。変わった音が聞こえたのは、ただあなたの聴覚がいつもとは違っているためだと思います」それまでは私もそう思っていたし、今でもそう思っている。ただ、実際にはどうだったのか、絶対に確実なことは知る由もない。

私がジョン・ステディマンに後を任せて船室に戻ったとき、船は波を突っ切って高速度で帆走していた。依然として真後ろから追い風が吹いていた。船は快調に進んでいたが、帆は絞られ、必要以上の装具は使っていなかった。万全の準備がなされ、不備な点は何もなかった。美

しい海面が波立ってきたが、それほどの荒波ではなく、波が逆巻くこともなかった。

私は、船乗り言葉で、艀装を解かず吊り床に入った。つまり、服を着たままで——いや、外套さえ脱がないで横になった。ただ靴だけは脱いだ。甲板を歩き回って足がひどくむくんでいたからである。船室には小さな吊りランプが灯っていた。目を閉じる前にそれを見ると、暗闇で疲れ、暗闇で苦しめられていたものだから、百万もの皓々と燃えるガス灯に照らされていてもぐっすり眠れそうな気がした。それが眠る前に最後に思ったことであるが、ただ頭を占めていたのはまったく眠れないだろうという思いだった。

私はペンリスに戻っている夢を見た。夢の中で私は、最後に見てから、異様な状態で尖塔の中央部が下に向かって割れていて、形がすっかり変わってしまった教会を回ろうとしていた。なぜ回ろうとしていたのか分からないが、私はそれに自分の命がかかっているかのように、何が何でも回ろうとしていた。実際に、夢の中ではそれに命がかかっていたのである。にもかかわらず、私は教会を回ることができなかった。そうしようとなおも頑張っていると、激しい衝撃を覚えて教会に衝突し、気がつくやうに吊り床から放り出されて船舷にぶつかっていた。木材の軋む音をはるかに超える悲鳴や恐怖の叫び声が耳を打ち、ぎいぎいと軋む音、物が壊れる凄まじい音、そして海水がどつと船に流れ込む音——それらは私が痛いほど知っている音だった——を耳にしなが、私は甲板に上がった。上がると言っても、それは生易しいものではなかった。船が恐ろしいほど傾き、制御できないままZ字形に漂流していたからである。

先に進んでも乗組員の姿は見えなかったが、彼らは慌てふためいて帆をたぐっているようで、その音は聞くことができた。私は手にラッパを持っていて、混乱が収まるまで乗組員に指図したり、励ます言葉をかけたりしてから、まずジョン・ステディマンの、それから二等航海士のウィリアム・レイムズの名を呼んだ。二人はしっかりと、はっきりした声で答えた。私はこれまでの航海でも、何か不慮の危機が訪れた時には所定の持場に就いて指示を仰ぐよう同乗の乗組員を訓練するのが常であったが、この度の航海でもこの二人に限らず、乗組員全員に対して同様の訓練をしていた。私の呼び声を聞き、それに答える声が聞こえたとき、私は船や波が立てる激しい音や下の船室から上がるけたたましい叫び声が瞬間的に途切れるのに気づいた。「備えはいいか、レイムズ？」——「アイ、アイ、サー」——「じゃ、灯りで照らしてくれ、頼む！」すぐにレイムズと別の一人が青花火を燃やし、その灯りで船と船上の人たちが、巨大で真っ暗な丸天井の下で、光の靄に包まれているように思われた。

照明の花火が高くあがったので、船が衝突した巨大な冰山を見ることができた。それは私が夢で見たペンリスの教会さながら、天辺と中央部から下に向けて亀裂が走っていた。同時に、交代したばかりの当直員が甲板で帆を上げ下げしている姿、そしてアサフィールド夫人とミス・コウルショーが下から子供を必死に連れ出そうとしなが、昇降口の階段の上で倒れたりよろけたりしているのが見えた。マストが衝撃と船の激しい動きで倒れるのが見えた。右舷の大半に恐ろしい亀裂が走って穴が開き、金属板や木材が激しい勢いで吹き散らされるのが見えた。カッターが粉々に壊れた残骸で用をなさなくなっているのを、そして誰も目の私に向けられているのを見ることができた。よしんば一万の目がそこにあつたとしても、私はすべての

目に込められたそれぞれの思いを読み取ったことであろう。全ては一瞬のことだった。しかし、一瞬がどれほど大きな意味を孕んでいるか、尋常ではとても想像できないであろう。

乗組員たちは私を見るとよろけながら指定された持場に向かい、あくまでしっかりと忠実に任務を果たそうとしていた。もし船が平衡を回復しなかったら、自分の持場にしようと、どこにしようとなす術がなく、いたずらに死を待つしかなかったであろう——人が任務を果たせず殉死しても、それは致し方ないと言うのではない——彼らは乗客や自分たち自身を救おうとしても何もできなかったはずだからである。しかし幸運なことに、破滅が運命の定めではなかったかのように、船は破壊的な氷山に一溜りもない形で激突して激しい衝撃を受けると同時に、ぶつかった激しい反動で氷山から離れ、平衡を回復したのである。船大工からの報告を受けるまでもなく、私は船が浸水し沈没しかけていることが分かっていた。それは見ても分かったし、その音を聞くこともできた。私はレイムズに指示して長艇と磯船を下ろさせ、乗組員にはそれぞれの任務を割り当てた。尻込みする者も、しゃしゃり出ようとする者もいなかった。私はジョン・ステディマンの耳もとで言った、「ジョン、私はこの舷門で、乗船者が船舷から落ちないように警戒に当たる。君には私の次に名誉ある任務に就いて、私と一緒に最後まで船に残ってもらいたい。乗客を甲板に上げ、私の後に並ぶようにしてくれ。そして、ボートに手に入るだけの食料と水を積み込んでもらいたい。船首の方を見ろ、ジョン、一刻の猶予もならないぞ」

私の信頼できる部下は、船舷からボートを海面に正しく下ろした。荒れる海であれほど見事にボートが下ろされるのを私は見たことはない。ボートが浮かぶと、最後にそれらに乗り込んだ二、三人の水夫が波のうねりと共に浮き上がったたり沈んだりしながら、何とか身体を支え、私を見上げて叫んだ、「ラヴェンダー船長、私たちに何かあって、あなたが助かるようでしたら、私たちがあなたを信頼していたことを覚えていてください」——「陸に上がったら、皆で互いに助け合っていけるだろう、神の思し召し次第だが！」と私は言った。「勇気を出して頑張ってくれ、女性たちに気を配るんだぞ」

女性たちは私たちの模範になってくれた。彼女たちは恐怖に襲われていたが、それを口にすることもなく、実に落ち着いて動揺の色を見せることはなかった。「キスして下さい、ラヴェンダー船長」とアサフィールド夫人が言った、「神さまがあなたを祝福されますように、船長さま！」「愛しいアサフィールドさん」と私は言った、「あなたの言葉は救命ボートよりも私に力を与えてくれます。私は彼女がボートに移るまで子供を抱きかかえていて、その子に接吻し、彼女を安全にボートに下ろした」私はボートに乗り込んだ乗組員たちに向かって言った、「私以外の者はみな乗り込んだ。私はまだしばらく残る。船から離れてくれ。近づかないように！」

それは長艇だった。老ラクスはそれに乗った船客の一人で、船が難破してからただ一人ひどく無作法な振舞いを続けていた。他の人たちも少しは苛立っていたが、それは当然のことで、別に咎め立てするほどのことではなかった。彼は哀れっぽい声を上げて騒ぎ立て、それを耳にする人たちを危険にさらしていた。意気地なさや勝手な振舞いは、周囲の人にきまって感染していくからである。彼は絶え間なく叫び声を上げ、子供と引き離さないでくれ、子供の姿が見

えない、私はぜったい子供と一緒にいる、と喚いていた。私が抱いている子供を自分が抱こうとして、無理やり奪い取ろうとしたことさえしたのである。「ラクスさん」と、私は彼を遮って言った、「私はポケットに弾を込めたピストルを持っている。舷門から離れて大人しくしないと、あんたの心臓をぶち抜きますぞ。あんたに心臓があればの話ですが」彼が言った、「まさかそんなことを、ラヴェンダー船長！」「やりますよ」と私は言った、「あんたの機嫌を取るために四十四人の人を殺すことはしません、皆を助けるためにはあんたを殺します」その後、彼は大人しくなり、少し離れた所で震えていたが、私から名を呼ばれて舷側からボートに移った。

長艇が索を解かれ、磯船もすぐに満員になった。ゴールデン・メアリ号に残ったのは青花火を打ち上げ続けていたジョン・マリオン（彼はまるで自らが光を発しているかのように、泰然自若として絶え間なく花火を打ち上げていた）、ジョン・ステディマン、それに私の三人だけだった。私は急いで二人を磯船に乗り込ませ、船から離れるように呼びかけ、ほっとした嬉しい気持ちで、長艇ができるなら船に接近して、私を乗せてくれるのを待った。私は懐中時計に目をやった。青花火の明りで見ると、二時十分だった。船員たちは機を失せずボートを操り、私はそれが船に近づくとここを先途と飛び下りて船員たちに言った、「皆、身を入れてやれ！メアリ号がぐらついている！」メアリ号を飲み込もうとする渦から一インチも離れないうちに、ジョン・マリオンが磯船の前方で燃やし続けていた青花火の明りで、船が傾いて舳先から海底に沈んでいくのが見えた。「おお、愛しいゴールデン・メアリ号！ おお、見よ！ 万歳！ おお、海の底に消えた愛しいゴールデン・メアリ号に栄あれ！」そして照明の火が燃え尽き、真っ暗な闇が私たちを蓋うように思われた。

私たちが皆山の頂上に立ち、眼下で他の全ての世界が沈んで行くのを目の当たりにしたとしても、私たちが広漠とした大海に取り残されて、ほとんどの者が半時間足らず前には安心して眠っていた素晴らしい船が永遠に消え去ったと知った時に覚えたほどの衝撃と寂寥感に襲われることはないであろう。私たちが乗った長艇は恐ろしい静寂に包まれ、オールを漕ぐ水夫や舵取りは麻痺にかかったようで、海の上を漕いでいるようには思えなかった。

その時、私は大声を出して言った、「私たちは救われた、皆で主なる神に感謝しよう！」全ての声（子供の声までが）それに応えた、「私たちは主なる神に感謝する！」私はそれから「主の祈り」を唱え、全ての船員が私の祈りに従って小さな声で厳粛にそれを復唱した。そして私が「元気を出すんだ、さあ、元気良く！」と言葉をかけると、船員たちはそれに応じてまたボートを何とかして操っているようだった。

その時、磯船で自分たちの位置を私たちに知らせるために青花火が打ち上げられ、私たちはその方に向かい、可能な限り接近してそれに横づけしようとした。私は船に積んでいた全てのボートに一、二本の頑丈な綱を常備するようにしていたので、二隻のボートにもすぐ使える綱が積まれていた。私たちは四苦八苦しなながら何とか互いのボートを近づけ、青花火（その夜以降は、海水が染み込んで使い物にならなかった）を分け合い、引き綱を二隻の間に渡した。私たちは一晩中並んで漂い、時には綱を緩めたり、時には引っぱったりしながら、誰もが首を長

くして朝になるのを待っていた——なかなか明るくならないことに業を煮やして、ラクス氏が私を怖がりながらも喚くように言った、「世の終わりだ、太陽はもう昇らんぞ！」

夜が明けると、私たちは惨めな姿で身体を丸め、寄り集まっていた。私たちは大海にぽつんと取り残されていて、長艇に乗っている者を点呼すると、三十一人が乗っていて、少なくとも六人は定員を超えていた。磯船には十四人ほど乗っていて、少なくとも四人が定員を超えていた。まず私は舵のある後部に自ら移動し——その時から私が舵を取った——それからアサフィールド夫人と子供を私の隣に座らせた。ラクス老人には、私たちからできるだけ離れた前方に移ってもらった。そして私が倒れた時に私に代ってすぐに誰かが舵を取れるよう、最も腕の確かな数人の水夫たちを私の傍に置いた。

陽が昇ると空はまだ曇って荒れ模様だったが、海は穏やかになり、私たちは磯船に呼びかけて、備えはどうかと尋ね、また長艇にあるものを調べて磯船に伝えた。私はポケットに、磁石、小型の望遠鏡、二連のピストル、ナイフ、それに火口箱とマッチを入れていた。部下のほとんどがナイフを持っていて、煙草を少し、そしてパイプを持っている者もいた。さらに取手付きジョッキが一つ、鉄製のスプーンが一本あった。糧食はというと、長艇に二袋のビスケット、一塊の生の牛肉、一塊の生の豚肉、焙じてはいるが豆のままのコーヒー（何か他のものと間違っただけで投げ込まれたのではないかと思う）が一袋、二つの小さな樽に入った水、小樽に入った半ガロンのラム酒などがあつた。磯船にはこちらよりも少し多めにラム酒があつて、私たちよりもそれを飲む者が少ないこともあつて、私の目算ではクォートほど私たちの小樽に加えてもらった。そのお返しに、私たちはコーヒー豆を両手で三回ほど掴み、それを一枚のハンカチに包んで先方に送った。彼らは、ラム酒以外にも、ビスケット一袋、一塊の牛肉、水を入れた小樽、レモンの入った小箱、それにオランダ産チーズがあると知らせてくれた。糧食の交換には長い時間を要し、双方とも危険が伴わないわけではなかつた。高波のために互いのボートに近づくのがきわめて危険だったからである。私は手帳を裂いて鉛筆で走り書きした紙をコーヒーの包みに入れてジョン・ステディマン（彼は羅針盤を持っていた）に届け、それには私が進もうとしている方角、つまり、陸地に達することができそうな、あるいはどこかの船に救助されることが望めそうな進路を書いていた——「望めそうな」と言ったが、どちらにしても助かる希望はほとんどないと私は思っていた。それから私が皆に聞いてもらえるような大声で彼に呼びかけ、二隻のボートが生死を共にできるなら、定めに従おう、しかし、天候の加減で離れ離れになるようなことになったら、私たちは君たちのために神の祝福を祈るし、君たちも同じように私たちのために祈ってくれ、と頼んだ。それから私たちは彼らのために万歳を三唱し、彼らもそれに応えて私たちのために万歳を三唱した。それから両方のボートで水夫たちが頭を沈め、オールを漕ぎ始めたのが分かつた。

この取り決めをした後、誰もが皆を思いやる気持ちを強くしていた。ただ（私は「皆を思いやる」と言ったが）、その結果として、いっそう悲しい思いをすることになった。私は、共に漂流する仲間に、ほんの僅かしかない食料のことを言葉少なに伝え、もし私たちが大海原で救われるとしたらその食料に私たちの命がかかっている、限りなく節約して厳しく不足を補わない

といけない、と言った。それに対して、船長がいちばん良いと考えて割当てを決められるのであれば、それがどんなに厳しくても従います、と皆が異口同音に答えた。私たちは銅メッキした薄い板金と縋り糸で秤を作り、皆の間でいちばん重いボタンを集めて、私が手に取った感じで二オンスを少し超えるぐらいの重さになる錘を作った。その時からずっと、一日に一度、誰もが口にできるのはそれだけだった。ただ天気がよければ、それに加えて一粒のコーヒー豆、時にはその半粒が朝食に配られた。それ以外には何もなく、ただ一日に半パイントの水と、身体があまりの寒さで衰弱したりした時には、元気づけにスプーン一杯のラム酒が一人ひとりに与えられた。ラム酒が毒になると物知り顔でよく説かれることを知っているが、私にその時に置かれた状況では、私が書物で読んで知っている同様の状況全てにおいて——それは数知れない——ラム酒が私たちをどんなに慰め、力づけてくれるものであるか、とても言葉では言い尽くせない。またラム酒のお陰で、私たちの中で半数を超える者が命を救われたと、私は確信している。一日に半パイントの水を割当てたと先に言ったが、時にはそれが少な目になったり、多目になったりしたことを言っておかなければならない。多量の雨が降り、その時に帆布を広げて、それに雨水を溜めていたからである。

こうして、一年でも大荒れの天候に見舞われる時期に、世界でも大しけが多発する海域で、私たち難船者は波のうねりのままに浮き沈みしながら漂流していた。私は、私たちの悲しい境遇にまつわる状況を（できることなら）語りたくない。そんな話は私が語るよりも、他にも多くある同種の物語を読んでいただければよい。私たちと同じ苦境に立たされた人たちのことが、より真実味をもって語られているからである。ただ次のことだけは、ざっと言っておきたい。連日連夜、私たちは背中を波で濡らしながら、ボートの浸水を防ごうとしていた。その役目に当たる水夫たちが休む間なく水をかい出し、私たちが被っていたどんな帽子もそのためにすぐに用をなさなくなった。水をかい出すのに使えるのは帽子だけだったからである。別の水夫たちがボートの底に横になり、三つ目のグループがオールを漕いでいた。誰もがすぐに水ぶくれとおできだらけになり、服は襤褸切れ同然になっていた。

磯船のことはいつも私たち誰もの心配の種になっていたもので、たとえ私たちが助かるにしても、長艇で生き残った者が、磯船の生存者の運命に無関心でいられるような時がほんとうに来るのだろうか、と私はよく思ったものである。天候が良い時には、私たちは引き綱を渡してボートを互いに近寄せようとしたが、そんな機会にはあまり恵まれなかった。実際のところ、双方のボートが視界に入る位置でどうして漂流を続けることができたのか、慈悲深くもそれを可能にして私たちに慰めを与えて下さった神の御心であったとしか言いようがない。朝の光が射したとき、互いのボートを探して荒海に目を凝らしていた皆の眼差しが忘れられない。一度、七十二時間ほど離れ離れになったことがあって、その時には双方とも仲間のボートが沈んだものと思った。再び他方のボートが見えた時の双方の喜びには、何か神聖なものが感じられた。誰もが互いのボートに乗っている人たちのことを思って、喜びと同情の涙に咽び、自分たちの辛さをすっかり忘れていたのである。

私は、自分なりの言い方だが、この話の個人的というか私的な面を伝えたいと思ってきた。

それを述べるに当たって、前述した経緯がその糸口になってくれる。ボートで漂流する私たちの忍耐と優しさには驚くべきものがあった。女性たちがそうした気持ちを表しても、私は別に驚かなかった。女性に生を受けた男性は誰でも、自分たちが挫けた時に女性たちが発揮する素晴らしい特性を知っているからである。しかし、そうした特性が幾人かの男性たちにあることを知って、少し驚いたことを私は認めなければならない。何事もない順調な状況の中でも、三十一人もの人間が集まれば、たいてい、まあ、二、三人は情緒の不安定な者が混じっているであろう。私は、難船者の中に、一人ならず無作法な者がいるのが分かっていた、彼らを監視できるよう長艇に乗せていた。しかし、彼らは苦難に遭って心を和らげ、婦人たちに対して、また子供に対しても、皆の中で、というか男たちの中で誰にも負けないほどの思いやりを持ち、同情を寄せていた——実際、彼らは彼らなりに精一杯の優しさを示していたのである。不平不満の声はほとんど聞かれなかった。横になって寝ている人たちから、かなり大きな呻き声が聞こえ、水夫——必ずしも同じ水夫ではなかったことは確かであるが、ほとんど全ての水夫が折りに触れて悲しそうな声を上げていた——がオールを漕ぐとか、決まった位置にいる時に、海の彼方にぼんやりと目を向けながら呻き声を出しているのに、私はしばしば気づいていた。水夫が長い間そうした状態に陥っていて、私がたまたま彼の目を見れない時には、彼は痛切きわまりない様子でずっと呻いていたが、私と目が合ったとたん、彼は晴れやかな顔になって呻くのをやめるのだった。彼は自分が呻いているとは知らないで、ただ鼻歌を歌っていると自分では思っていたのではないかと私はいつも感じていた。

寒さと身体が濡れることによる苦痛は、飢えによる苦痛よりもはるかに辛かった。私たちは寒さから何とかして子供を護ってやろうとしていたが、五分も続けて暖かい思いをした者は私たちの中に誰もいなかったと思う。皆が寒さで身体をぶるぶる震わせ、歯をカチカチと鳴らしていたが、それは耳にするも悲しいことだった。子供は遊び相手のゴールデン・メアリ号がなくなって最初は少し泣いていたが、その後はほとんど涙ぐむことはなかった。天気が良くて見通しがきく時には、彼女はよく船員の誰かに高く抱え上げてもらって、海の遠くに目をやって、ジョン・ステディマンのボートを探すことがあった。今も、私と風に吹き流される雲の間に、まるで地上から飛び去ろうとしている天使のように、金髪をした幼女のあどけない顔がまぎまぎと目に浮かんでくる。

二日目の日暮れ近くのことであつたが、アサフィールド夫人がリトル・ルーシーを寝かしつけようとして、彼女に歌を聞かせてやっていた。彼女は優しく美しい声をしていて、歌い終わると船員たちが身を起こして、もう一度歌って欲しいと頼んだ。彼女はそれに応えて一曲歌い、暗くなってから最後に「夕べの歌」を歌ってくれた。その時から、波や風の音が静まって声が少しでも聞き取れ、そして彼女に歌えるだけの声が少しでも残っている時には、日没になって彼女が歌ってくれることが何よりも皆を安らかな気持ちにしてくれるのであつた。彼女はいつも進んで歌ってくれ、最後に歌うのはきまって「夕べの歌」だった。私たちは最後の歌詞を声を合わせて歌い、歌い終わると涙ぐんでいたが、悲しい気持ちになつたからではなかつた。天気が良ければ、私たちは夜と朝、一緒に祈りを捧げていた。

十一日と十二夜の間、私たちはボートで漂流していた。その頃、ラークス老人は錯乱状態になり、金を海に捨てろと私に向かって喚いた。そうしないとボートが沈没し、皆が死んでしまうと言うのだった。数日前から、子供が元気をなくしていて、それが彼の狂気の主たる原因だった。彼は、残っている食料を全て子供に与えてくれ、何が何でも子供を救うんだ、そうしないと全滅だ、と金切り声を上げて何度も叫んでいた。その時、ルーシーは母親の腕に抱かれて、私の足もとで横になっていた。彼女の小さな手が絶えず母親の首や顎のあたりを撫でていた。私はその可愛らしい手がやせ細っているのを見て、もう命が持たないことが分かった。

母親の穏やかな心と優しさに触れていると、老人の叫び声がひどく耳障りだったので、すぐに大人しくしないと誰かに命じてあんたの頭をぶん殴って海に放り出しますよ、と私は怒りの声を張り上げて言った。それで老人は大人しくなっていたが、その一時間後にルーシーが穏やかに息を引き取った。ボートの全員にそれが分かったのは、母親が難船して初めてわっと悲嘆の声を上げたからであった——小柄で優しい女性であったが、彼女は気丈で揺るがない心を持っていた。ルーシーの死を知ったラークス老人はすっかり手に負えなくなり、身にまとっている襤褸切れ同然の服を引き裂き、呪いの言葉を喚き散らし、私に向かって、金を投げ捨てていたら（彼の思いは常に金だった！）子供を救うことができたのに、と喚いた。「これで」と彼はぞっとするような声で言った、「わたしたちは海に沈んで、破滅する。わたしたちの罪で滅んでしまうのだ。わたしたちを守ってくれる罪のない子供がいなくなったんだからな！」後で分かって驚いたのだが、この卑劣な老人が気にしていたのは、私たち誰もが大切にしていた可愛らしい少女の命のことだけだった。彼女が自分を保護する力を持っていると、勝手に思い込んでいたのである。総じて、それは老人の隣に座っていた船大工兼兵器係にとってとても我慢のならないことだった。彼は老人の喉をつかんで漕ぎ手座の下に転がし、老人はその後ぐうの音も出ないまま何時間もそこに転がっていた。

十三日目夜の夜の間中、ミス・クロウショーは舵を取っている私の膝下で横になり、悲しみに暮れる母親を慰め、元気づけていた。子供は私の水夫用のジャケットで包まれ、母親の膝に載せられていた。私たちの間に祈祷書がなく、埋葬式文の正確な言葉もほとんど思い出せず、そのことで私は一晩中悩み続けていた。夜がすっかり明け、私は立ち上がった。哀れな難船仲間たちはそれで私が儀式を始めようとしていることが分かり、頭から帽子を取ろうとする仕草を見せた。ただ、うんざりするほど長い間、彼らの頭は空と波に直接さらされていて、それを防ぐための被り物らしきものは影も形もなかった。その朝、大きく強いうねりが押し寄せていたが、それ以外には上天気で、日光が東の海一面に注いでいた。私はただこう言っただけだった、「私は甦りであり命である⁸、と主は言われる。主は会堂司のヤイロの娘を起こして甦らせ、娘は死んだのではない、眠っているだけだ、と言われた⁹。主は寡婦の息子を甦らせ¹⁰、自らも甦り、多くの人々がその姿を見た。主は幼子を愛され、わたしの所に来るままにしておきなさい、止めてはならない、神の国はこのような者の国である¹¹。主の御名によって、諸君、この子を慈悲深い善なる神に委ねます！」こう言って私は自分の荒くれた顔をそっと穏やかで幼い額に押し当て、ゴールデン・メアリ号が葬られた海原にゴールデン・ルーシーを葬った。

この愛しい少女の最期を語ろうとずっと思っていたが、いちばん適切なところで述べる機会を失ってしまったので、ここで埋め合わせをしようと思う。ここでそれを述べるしかないであろう。

荒天のもとでたとえボートが漂流を続けられても、口にできるものがまったくなくなる時が必ずやってくるし、それも間もなくであろうと予見されたことから、ある重大な問題がしばしば私の頭を悩ませていた。それよりもずっと前から、私は、究極状態に置かれた人間が互いを食し合ったという事例はごく稀なことで、実際、どんなに恐ろしい状況に置かれても、極限に置かれた人たちは節度のある忍耐と抑制に馴化していくもので、そんな恐ろしいことはめったに起こることはない(たとえその可能性があったとしても)、と確信していた。今言ったように、この問題で私はずっと前からそんなことはあり得ない話だと確信していたが、以前の事例で、いくら知らない振りをしたり考えないようにしても、何らかの危害や危険がほんとうになかったのであろうか、と私は疑心暗鬼の状態だった。何人かの難船者の中に、飢えや風雨にさらされて秘かにあの恐ろしい思いに取り憑かれ、その思いがどんどん膨らんで我慢しきれなくなる者がいるのではないかと私は感じた。それは別に私が思いついたものではなく、読み物から知っていたことだった。しかし、ボートで漂流していると、その思いはそれまで感じなかったほど強く——そう感じる理由があった——私の心を捉え、四日目に、私は誰も心の多少とも燻っているに違いない不安を明るみに出すことに決めた。それ故、不安な時を紛らせて希望を抱かせるために、私はバウンティ号の反乱の後、覆いのないボートで三千マイル以上の漂流を続けたブライ艦長¹²の航海のこと、そしてボートで漂流した乗組員が不思議な力によって護られたことを、できる限りかいつまんで話した。皆は一心になって私の話に耳を傾け、私は次のように言って話を結んだ。私がこの話でいちばん幸いと思う出来事は、飢餓によってありとあらゆる辛酸を嘗めた人たちが、どんな悲惨な状態に追い込まれても、お互いを食し合うようなことはしなかったことを確信している、とけっして気を配る人ではなかったブライ艦長が厳粛な思いで記録に残していることです——と皆の心に語りかけたのである。ボートに乗った人たちの心に目に見えるように広がった安堵の表情、そして皆の目に浮かんだ涙、それを言い表す言葉がない。その時からブライ艦長と同じように、私は、皆が危険な思いに陥ることがなくなり、少なくともあの幻に私たちが付き纏われることはないことを確信した。

さて、ブライ艦長の体験の重要なところであるが、ボートで漂流する人たちが意気消沈したとき、彼らを何よりも元気づけたのは、同じ難船者の話を聞くことだった。私がそのことを話すと、すぐそれに関心を示した表情が皆の顔に浮かんだだけでなく、私自身も大いに興味をそそられた。この話の中で私がそのことを思いつくまで、まったく考えてもみなかったことだからである。それはアサフィールド夫人が歌を歌ってくれた翌日のことだった。私は、日没時の歌だけでなく、食事後(私はいつも先に言った食料を一時に配ることにしていて、それを割当てと言っていた)の二時間ほど、話を皆でしてはどうかと提案した。その提案を誰もがにこにこ嬉しそうに受け入れてくれたので、私の心に熱いものが込み上げた。二十四時間のうちで二度ほどそうした時を過ごすことができた私たちは、期待に胸を膨らませてその時を待ち、誰

もが歌や話を心から楽しんでいた。身体は間もなく痩せこけて亡霊のようになってはいたが、私たちの想像力は骨についている粗末な肉と違って、朽ちることはなかった。神が人類に与えた素晴らしい賜物である歌と冒険譚が、身体が痩せ衰えた後もずっと私たちの心を慰めてくれたのであった。

二日目以降、私たちは決まったように向かい風を受けていた。そして何日も何日もそれが続き、私たちは今にも挫けそうになっていた。私たちは、雨、霰、雪、風、霧、雷、稲妻といった、ありとあらゆる悪天候に見舞われた。それでも荒れ狂う海でボートは漂流を続け、死の瀬戸際にある私たちは大きな波のうねりのままに浮いたり沈んだりしていた。

十六夜と十五日、二十夜と十九日、そして二十四夜と二十三日が経った。こうして時は過ぎていった。私たちの進み具合とか一向に進めないことで、皆が気落ちすることが分かっていたので、私は予測を口にして皆の気を紛らせるようなことはしなかった。第一に、私たちが破滅寸前に置かれているからには、誤魔化しても意味がないと感じたのである。第二に、もし私が倒れるか死ぬことになれば、私の志を継ぐ者が真実の事態を掌握して、務めを果たしてくれることが分かっていたからである。正午に、ボートの進行が捗っているのかいないのか、私が推定する現状を話すと、皆は総じて冷静にそして諦めの表情を浮かべてその言葉を聞いていた。その間もずっと彼らは私に対する感謝の気持ちを持ち続けてくれていた。誰かが、昼夜を問わず、理由もなく突然大声でわっと泣き出すことがよくあった。その発作が治まると、泣き出した者の気持ちが前よりも少し落ち着くのだった。私は喪に服している家でもそれと同じ事を経験したことがあった。

こうして時を過ごしていた間中、ラークス老人はよく発作的に私に声をかけ、金を（金のことしか彼の頭にはなかった！）海に捨てるように大声で命じ、子供を死なせたことで激しい非難の言葉を浴びせていた。しかし、食料が尽き、時折りコーヒー豆を少しだけしか配れない状態になると、彼は喚く元気もなくなってきて、やがて何も言わなくなった。アサフィールド夫人とミス・コウルショーは、たいてい片方の腕を私の片膝の上に載せ、その上に頭を載せて横になっていた。彼女たちはひと言も不満を口にすることはなかった。アサフィールド夫人は彼女の子供が亡くなるまで、自分の美しい髪を毎日束ねていた。彼女がそのような髪を整えていたのは、いつも皆が彼女に目を向けるとき、つまり夜に彼女が賛美歌を歌う前であることに、私は特に気づいていた。しかし、彼女は愛するわが子が亡くなってからは、髪に気を配ることはしなくなった。彼女の髪は汚れと湿気ですっかりもつれていたことであろうが、ミス・クロウショーが自分を取り戻してずっと経ってから時々彼女のやせ細った手でその髪を撫で、整えてやっていた。

私たちはもう話をする元気もなくなっていた。しかし、この時期のある日のこと、私はゴールデン・ルーシーにまつわるラークス老人の恐怖心に話を戻し、人間の目からは多くが消えて行くが神の目には何一つ消えることはない、と皆に語りかけた。「私たちは皆」と私は言った、「かつては子供でした。私たちはよちよちした足で陸上の森を歩き、小鳥が囀っている庭で、可愛らしい手で花を摘んだことがあります。わが造り主は、その偉大な力によって誰もが子供

であった時のことを覚えておられるのです。そうした無垢な子供が主の御前に出て、私たちの救いを請い求めてくれます。私たちにとって最善の時期である高潔な青春時代が甦り、また私たちはその高潔な心を持って歩いて行くのです。私たちの身に宿る最も純真な魂は、私たちが現在置かれている苦境にあっても、私たちの心から消え去ることはないでしょう。子供の時の私たちは、今の私たちと同じように、主の御前にあって変わることなく生きているはずですが、私自身もそうであったが、こうした思いを胸にして皆は慰められた。ミス・クロウショーは私の耳を自分の唇に引き寄せて言った、「ラヴェンダー船長、私は恥辱に染まって生きる気力を失った人と結婚しようとしています。その人は高潔で健全な志を持っていて、私は彼を心から愛していました。あなたのお言葉は、私自身の哀れな心から出たような気がします」そう言って彼女はにっこりと微笑み、自分の胸に私の手を押し当てた。

二十七日と二十六日。雨水には事欠かなかったが、他には何もなかった。それでも、事ここに至っても、私が起きている顔に目を向けると、その顔は必ず私の目に応えて微笑もうとするのだった。何ということだろう、危機に瀕し、死を目の前にしながらも、どの顔にも浮かぶ明るい表情！ 私が聞き及ぶところでは、大きな新式の船では、電信によって命令の伝達をすることが提唱されているようである。私は機械の素晴らしさは誰よりも認めているし、その有用性をありがたく思う気持ちは人後に落ちない。しかし機械は、魂のある人間の顔の代用は無理で、他の人を励まして勇氣と真心を持たせるようなことはできっこないのである。そんなことを機械にさせようなんて考えるべきではない。藁のように瓦解するのが落ちである。

さて、私は自分自身の心に、あまり好ましくないある変化が起きてきたことを話し始めたところである。私はそのために強い不安に駆られるようになった。ボートの上空に、ゴールデン・ルーシーの姿をしばしば目にするようになったのである。前にも話したような姿をして、彼女が私の傍に座っているのを何度も見た。私はゴールデン・メアリ号が、以前に沈没した時に見たそのままの状態、海の底に消えて行くのを一日に二十回は目にしていた。そしてその海というのが、たいていは実際の海とは思えないもので、動く陸地とか途轍もなく険しい山岳地帯といった感じで、それらしきものは現実に見たことはなかった。私は、そろそろジョン・ステディマンに関して遺言を遺す時になったと感じた。誰か生き残った者が生ある人の耳に伝えてくれるようなことがあれば、彼のことを話して欲しいとの思いからだった。私は皆に次のように言った。大波が見えた途端、彼が（甲板で叫んだ警報だったが）「針路上に危険な波浪が見えます！」と大声で私に言い、船を下手回しにしようとしたが、それができないうちに激突してしまった（彼の叫び声が、おそらく私の夢のもとになったのではないかと思う）、事態はまったく予測できなかったことで、防ぎようのない成り行きだった、そして私が舵を取っていても同じ結果に終わっていたであろうし、ジョンに非はなく、彼は持ち前の男らしさを発揮して最初から最後まで立派に義務を遂行していた、と。私は手帳に思いを書き留めようとしたが、言いたいことは分かっている、それが言葉にならなかった。事ここに至ったとき、少女の手が——ずっと前に天に召されていたが——ボートの底に優しく私を寝かせ、許婚の女性とゴールデン・ルーシーが私を永遠の眠りに就かせてくれたのである。

以下は、ジョン・ステディマン一等航海士が書き遺したものである

ゴールデン・メアリ号が難破して二十六日後、私ジョン・ステディマンは、感覚を失いかけてやっと舵が取れる状態——つまり、目をかっと見開いてボートの舳先に目をやっていたが、頭の方は眠って夢を見ていた——で、持場である磯舟の船尾の床板に座っていたが、そのとき、二等航海士のウィリアム・レイムズが急に私を呼び起こした。

「役目を交代させてください」と彼が言った。「長艇の船尾の方を見張っててください。ボートがこの前波頭の上に浮き上がったとき、その上に何か信号が上がった気がしました」

私たちは、のろのろと難儀しながらやっとのことで交代した。二人とも衰弱して、雨や波で身体が濡れ、寒さや飢えで気が遠くなりかけていたからである。私はしばらくじっとしたまま、船尾の大きなうねり見ていたが、やがて長艇が私たちのボートと同時に波頭の上に浮き上がった。やがて、一瞬、うねりで持ち上げられた仲間のボートが見え、たしかにボートに上に合図が出されていた——何か檻褸切れ端がオールに結びつけられて、舳^{へきき}に掲げられていたのである。

「どういうことですか？」とレイムズがわなわなと声を震わせながら言った。「帆で訃報を知らせているのでしょうか？」

「しっ、声を出すな！」と私は彼の口に手を当てて言った。「皆に聞かれないようにしてくれ。あの合図を間違っ^て知らせたら、みんな気が狂ってしまうぞ。ちょっと待って、私がもう一度見る」

私は彼から離れないようにしていた。帆が半旗になっていると彼が言ったことで、私は体中に震えを覚えていたからである。私はまた長艇を注視した。また波が大きくうねり、その上に長艇が姿を現した。私は二度目にそれを目にして、合図をはっきりと認めた。帆が半旗の位置に取り付けられていた。

「レイムズ」と私は言った、「あれは悲報の合図だ。ボートを波の前方に保つよう伝えてくれ。それだけでいい。長艇に声が届く距離まで近づくんだ。できるだけ早く」

私はそれ以上何も言わず、舵の近くのいつもの位置に倒れ込んだ——ラヴェンダー船長に何かあったのではないかという不安が、私の体をナイフのように貫いたからである。もし真実を、全ての真実を、そして真実のみを話そうと覚悟していなかったら、私は自分がこの話を一行たりとも書くに値しない人間だと思うだろう——それ故、この時初めて私の心が萎えてしまったことを包み隠さず述べなければならない。思うに、私はそれまでの不安や悲しみによって心身を擦り減らして、そのために気弱くなっていたのかもしれない。

私たちの糧食は——残っているものにそんな言い方ができるとしての話だが——レモンの皮一つと二つかみほどのコーヒー豆だけになっていた。乗組員や乗客が見舞われている死や危険や苦しみといった大変な窮状に加えて、航海に出たからとても好きになっていた子供が亡くなったことで、私自身も少し苦悩を覚えていて、さらに心が揺さぶられていた——とても可愛く思っていたので、船が沈没したとき、私の方のボートではなく彼女が長艇に乗せられてしまっ

て、私はそれを秘かに妬んでいたのである。私たちがゴールデン・メアリ号の最後を目にしたあと、荒波が治まった時に、長艇に乗った水夫たちが、そのボートで誇れるこよなく明るい存在として、ゴールデン・ルーシーを高く抱き上げてくれた。それを見ると、私も同じボートに乗っている人たちも、大きな慰めを覚えるのだった。距離が離れていたため、私たちの目に映った彼女の姿はさながら空中に舞う小さな白い鳥のようだった。天候がまた少し和らぐと、誰もが慰めとなってくれた白い小鳥を探し求めたが、以前に見えたその姿が見られなかったことで、私たちはすっかり滅入ってしまった。数日後、私たちが長艇に呼びかけたとき、水夫たちが頭を垂れ、船長の手が海の中を指すのを見て、私はそれまで味わったことがないほどの痛烈な衝撃と苦痛を覚えた。私がこうしたことを記すのは、ただ、もし私たちの船長を失うという恐怖に私が最初少しひるむということがあったとしても、それは一人の人間が背負うことのできる負担よりも重い試練によって、その前にすっかり気力が萎えていたということからである。

私は水を一滴飲んで喉のつかえを取り、心を落ち着かせて最悪の事態に備えようとした。その時、私たちに呼びかける声が聞こえた（ああ、可哀想に、なんと弱々しい声だったことか！）

目を上げると、苦難に喘ぐ仲間たちが波にもまれて私たちのボートと共に上下していた。顔の見分けがつくほどではなかったが、烈風が治まる合間に、私たちのように体力を消耗した者でも声を張り上げれば、相手にそれが届く距離だった。

私は彼らの呼びかけに応じてしばらく待ったが、何も聞こえなかったので、船長の名前を呼んだ。それに応じた声は、船長の声とは違っている感じだった。私たちの耳に届いたのは次の言葉だった、

「一等航海士、こちらに移ってくれ！」

こちらのボートに乗っている船員たちは、私と同じようにその意味が分かっていた。指揮を執る二等航海士として私を長艇で必要とする理由は一つしかあり得なかった。皆が呻くような声を上げ、部下たちは暗い顔で互いを見つめ、声をひそめて言った、

「船長が亡くなった！」

私は、部下たちにそれ以上何も言わないように、そして、こうまで事態が悪化してきたのだから、これ以上悪い知らせを信じ込まないように命じた。それから私は長艇に呼びかけ、天候が許すなら、そちらに乗り込む準備はできていると伝えた。そして——少し言葉を切って、長く息を吸い込み——できる限りの声を張り上げて、恐ろしい質問を投げかけた、

「船長が亡くなったのか？」

私の声が届くと、長艇の船尾にいる三、四人の黒い姿がいっせいに項垂れるのが見えた。彼らの姿が一分ばかり見なくなり、それからまた見えてきた——その中の一人が他の船員に支えられて彼らの肩の上に立ち、嬉しい言葉を投げ返してくれた（私たちのように絶望的な状況に置かれた者にとっては、かすかな希望でも相当な力になってくれたのである。「まだ、生きておられます！」）

船長が任務は果たせなくてもまだ命があると分かったとき、私や傍にいた水夫たちが覚えた安堵感は言葉では——少なくとも、私のような人間が思いつくような言葉では——とても言い尽くせない。私は、恐れていたほど最悪の事態になっていないということはとても良い兆候だと言って、できるだけ皆を元気づけようとした。それから私が長艇に移った際に私に代って磯舟の指揮を執ることになるウィリアム・レイムズに、必要な指示を与えた。その後はなすべき事は何もなく、ただ日没に風が治まり、その後波が静まって衰弱した乗組員たちがそれほど危険なく——もっと正確に言うと、力や技を限度を超えて使う必要に迫られることのないように——互いのボートを近づけられる機会を待つだけだった。双方のボートでは、その頃には、何日も続けて乗組員たちが衰弱して動けなくなっていたのである。

日没になって突然風が治まったが、波はそれまで長い間荒れていたため、その後も静まって穏やかな状態になるまで数時間かかった。月が輝き、空は澄み切っていて、私の推測ではまだ真夜中には遠い感じだった。海は順調に静まって、波のうねりは緩やかで規則的になり、私は長艇と私たちのボートの間の距離を縮める指揮を執った。

おそらく、私の幻覚だったかも知れない。しかし、私たちが苦難にある仲間たちに近づいたその夜、月があればほど青ざめて白っぽく見えたことは、海でも陸でもなかったように思う。ボートの長さくらいの距離まで近づき、白い月光が私たち全ての顔を寒々と、そしてくっきりと照らしたとき、双方の水夫たちはオールを漕ぐのをやめ、互いの姿を初めて目にして恐怖に教われ、誰もが震え戦いてボートの縁から見詰め合っていた。

「亡くなった者は？」と、私は恐ろしい沈黙の中で問いかけた。

長艇に乗った人たちは、私の声を聞いて子羊のように身体を寄せ合った。

「子供以外は大丈夫です。ありがたいことです！」と一人が答えた。

その声を聞くと、今度は私の部下たち全員が長艇の人たちと同じように身を縮めた。湿気や寒さや飢えによって、ぎりぎりのところに追い詰められて生じていた恐ろしい変化に加えて、初めて間近で互いの変化を目にして皆が新たな恐怖に陥るのではないかという不安に駆られて、私はそれ以上の問答をする猶予を与えず、互いのボートを寄せ合うよう水夫たちに命じた。私が立ち上がってレイムズに舵取りを任せると、哀れな水夫たちはその蒼白な顔を上げて、哀願するように私の顔を見た。「私たちを見捨てないでください」と彼らが言った、「行かないでください」「後は」と私は言った、「お前たちをウィリアム・レイムズ航海士の指揮に任せる。彼は私に負けないほど立派な船乗りであり、誰よりも信頼の置ける、思いやりを持った男だ。これまで私に従ってきたように、彼のもとで責務を果たしてもらいたい。そして命ある限り希望があるということを忘れないように。神の恵みと加護を祈る！」こう言って私は残る力を振り絞り、私を抱き留めようと差し出された二本の腕の中に飛び込み、私の乗っていたボートの船尾床板から長艇の船尾に乗り移った。

「足もとに気をつけてください」と、手を貸して私を長艇に乗せてくれた水夫の一人が言った。そう言われて、私は足もとを見た。三人が足の下に身体を縮めて寝転がっていて、その傍に立ったりその上方に座ったりしている水夫たちの間から漏れるまだらな月光が、三人の顔を

照らしていた。最初に私が認めたのがミス・コウルショーの顔だった。彼女は眼を見開いて、じっと私を見ていた。彼女はまだ正気を保っているようで、唇を交互に開いたり閉じたりして何かを言おうとしていたが、彼女が発した言葉はひと言も聞き取れなかった。彼女の肩にアサフィールド夫人の頭が載っていた。すでに天国に召された愛娘のゴールデン・ルーシーの母親は、その子の夢を見ていたのであろう。私の目が上に向けられたその顔に最初に触れたとき、穏やかに閉じた目が天に向けられて、かすかな笑みはその無表情で蒼白な顔に過ったからである。彼女の少し下の方に目をやると、その膝に載せられている顔が見え、彼女の片方の手が優しくその頬に置かれていた——それは船長だった。この不幸が訪れるまで、常に私たちに力を与えて導いてくれた船長——私たちのために力を尽くし、私たちのために身を粉にして奉仕してくれた、誰よりも立派で勇敢な船長が最後に精根尽き果てて横たわっていた。私がそっと手を彼の服の中に入れて心臓に触ってみると、少し温もりを感じたが、私の麻痺した手ではまったく心臓の鼓動を感じるができなかった。船尾座にいた二人の水夫が私の所作を見て——彼らは私が兄弟のように船長を愛していることを知っていた——私自身の顔に無意識に表れている苦悩を察知したようで、彼らも自制心を失って急に哀れな呻き声を発し、船長の姿を見て悲しみの涙に咽んでいた。一人が被せていたジャケットをわきに引いて彼の足を私に見せた。それは濡れてぼろぼろになった長靴下の切れ端が片足にこびりついているだけで、裸足同然であった。船が氷山に衝突したとき、彼は船室に靴を残したまま甲板に駆け上がっていたのである。ボートで漂流している間、何も履いていない彼の足は無防備なままであったが、彼が命を引き取るまで、それに気づいた人は誰一人いなかったのである！ 彼が目を開けていられる限り、その眼差しが部下たちを励まし、女性たちを慰め力づけてきたのであった。ボートで漂流していた人たち誰もが、無関心でない限り、勇敢な船長が陰になり日向になって自分たちを励ましてくれるのを感じていた。彼が、彼自身の功績を他の人の手柄にし、忍耐や助力の大半が実際には彼だけに帰せられる時でも、ある人の忍耐を称え、ある人の助力に感謝しているのを誰もが幾度となく耳にしていた。水夫たちは、指揮官の傍に屈んでその死を悼み咽び泣きながら、彼の数々の思いやりや、さらに多くの事をとめどなく口にしながら、この上なく暖かく優しい気持ちでその冷たくなった足をジャケットで包んでやっていた。彼らの悲しい気持ちをさえぎるのは断腸の思いだったが、もしこうした悲嘆がさらに広がっていくと、ボートの生存者に少しでも残された希望と覚悟の光を保ち続けられる機会がすべて永久に失われることが私には分かっていた。そう思った私は水夫たちを所定の持ち場に就かせ、舳先の方にいる水夫たちに少し励ましの言葉をかけ、朝になったら食料箱に残っている食べ物をできるだけ皆に配ることを約束し、私がそれまで乗っていたボートで指揮を執っているレイムズに、安全な限り私のボートとの距離をできるだけ近く保つよう呼びかけ、難儀している二人の哀れな女性の衣服や覆いを身体にしっかりと合わせてやった。そして、今や私の双肩にかかっている大変な責任を最善に果たさせてくださいと心の中で祈って、今は亡き船長が就いていた長艇の舵のある位置に収まった。

以上が、私たちがゴールデン・メアリ号が氷山に衝突して漂流を始めてから二十七日目の朝、

私がいかなる経緯でその船で遭難した乗組員と乗客を導く責任を背負うことになったか、私が及ぶ限り伝えることのできる、余すことのない真実である。

注

- 1 クリスマスの季節。12月24日から1月1日まで。
- 2 原語はリヴァプール・ハウス。帆船で船橋甲板を持つために、船側から反対の船側まで続くように造られた甲板上の構造物。
- 3 ロンドンのトラファルガー・スクエアからセント・ジェイムズ宮殿にいたる街路。クラブ街として有名。
- 4 シティの西から東に走る大通り。
- 5 船が下手回しに回る事。
- 6 カルカッタの沖合いにある島。
- 7 この策止め栓に索具をS(8)字形に巻き付けて止める。長さ30センチほどの木または金属棒。
- 8 「ヨハネ伝」11:25。
- 9 「ルカ伝」8:41~48。
- 10 「ルカ伝」7:11~15。
- 11 「マルコ伝」10:14。
- 12 イギリスの海軍将校(1754~1817)。